

博士論文(要約)

帝政前期における剣闘士とローマ社会

阿部 衛

本論文は、帝政前期のローマ社会における剣闘士競技の社会的意義について剣闘士という存在に注目して考察するものである。これまで剣闘士競技の社会的意義にさまざまなモデルが提示されるなかで、剣闘士の存在そのものは見落とされ、詳細な検証もなされずに被差別の下層民に固定され、また剣闘士競技を取り巻く人々の関係性は「剣闘士」・「観衆」・「統治者」と固定的に捉えられてきた。本稿では、このように静的に捉えられてきた剣闘士競技に関わる人々を動的に捉え直し、ローマ社会に位置づけることを目標とする。方法としては、奴隷、一般市民、元老院議員や騎士身分といった上層民、そして皇帝といった多様な階層の人々と剣闘士競技との関係性を個別に考察し、それらを蓄積していく。

第1章では、剣闘士競技が帝国各地で長期に亘り実施されてきた社会的背景を探る。従来、剣闘士競技の運営は、中央と地方という対極的な二つの視点から捉えられてきた。本稿では、第1節と第2節で、両者の議論を確認したうえで、第3節でそれらを組み合わせることを試みた。実際に、双方の視点から剣闘士競技を分析したところ、一方皇帝の立場からは権力の強化や民衆の統制という点で、他方地方都市の名望家の立場からは、恵与行為に基づく名声の獲得や権力の継承といった点で剣闘士競技は重要な役割を果たしていたことが窺えた。このような前提のうえで、一見中央政府による介入に見える後177年の元老院決議を再検討したところ、同決議は実際には、増大する剣闘士競技の開催費の支出に疲弊する都市名望家層の救済の性格が強いことが読み取れた。そして帝政前期の社会において剣闘士競技の運営は、支配と従属の関係や、地方自治といった一方的な関係ではなく、双方に利益をもたらす互惠の関係であり、それこそが剣闘士競技の長期的な運営の秘訣であったと結論づけた。

第2章では、ローマ人民にとって剣闘士が矛盾に満ちた存在であったとの通説の見直しを図る。これまでローマ人民にとって剣闘士は憧れと同時に侮蔑の対象であったと考えられてきた。その一方で、先行研究においては、そのような態度を示した者たちを「ローマ人」と一括りに捉えるという問題点があった。そこで観衆の階層性に注目し、第1節では、剣闘士の称賛について、第2節ではその差別について伝える史料を概観した。その結果、剣闘士への称賛が幅広い階層に見られたのに対し、剣闘士への差別を伝える史料の対象には市民、それも元老院議員や騎士身分などの上層民が想定されていることが判明した。第3節では上層民の有した剣闘士像を探るべく、共和政末期を代表する上層民であるキケロの著作における剣闘士という言葉の用法を分析した。そこでは、侮蔑表現として用いられることが大多数であったものの、それらはもれなく上層民を対象としており、キケロが剣闘士全般を否定的に捉えている様子は見出されなかった。以上のことから、剣闘士は差別と称賛の入り混じった「矛盾に満ちた存在」であったという通説は、過度な一般化がなされていると結論づけると同時に、階層ごとに分析する本稿の手法の必要性を改めて確認した。

第3章では、奴隷にとって剣闘士という状態に身を置くことの意義について考察する。先行研究において、剣闘士は専ら奴隷から構成されており、死を宿命づけられた存在と考えられてきた。しかし、第1節で図像史料や文献史料における剣闘士と死の関係性について言及する箇所を分析したところ、剣闘士の死の局面が描かれるようになるのは、むしろ剣闘士の死の機会が減少するようになってからであり、史料上に現れる剣闘士の死は誇張されていた可能性が見出された。そこで、

第 2 節で法文史料や碑文史料からこの点について検証したところ、法文史料からは、隷属状態からの解放や市民権の獲得が制度化されていたこと、剣闘士の墓碑からは、実際に奴隷身分からの解放が行われていたこと、そして彼らは剣闘士となった後に人的紐帯を再編していたことが読み取れた。第 3 節では、剣闘士の生の側面に着目し、そのキャリアについて考察したところ、報酬面では身分の差異より剣闘士としての実績が重視されていることが窺えた。また、引退後の職業が用意されていたことに加え、剣闘士のなかには地域社会から顕彰碑を用意されるほど社会上昇を果たす者も存在したことが確認された。以上のことから、剣闘士という職業は死だけではなく、ローマの秩序の外側にいた人々を取り込み、再生をもたらす機能をも有していたことが明らかになった。

第 4 章では、一般市民にとっての生業としての剣闘士の可能性を探る。これまで市民による剣闘士競技への参加は極めて限定的なものと考えられてきた。しかし、第 1 節で雇用契約の存在を窺わせる史料を分析したところ、その多くには市民がそのような法的行為を行ったことを窺わせる叙述がなされていること、そしてそれらの史料が帝政前期の幅広い作家たちに確認できることから、市民が雇用契約を結び剣闘士競技へ出場することが決して珍しいものではなかった可能性が高いことが窺えた。そこで第 2 節で差別と制裁の射程を分析すべく剣闘士への差別を伝える史料を精査したところ、剣闘士に志願した者に科せられた罰則は、主として市民の中でも上層の者たちに不都合な制裁がなされていたことが判明した。このように、大半の市民にとって、剣闘士に志願することへの法的障壁はなく、職業の選択肢として十分に考えられるものであったことが明らかとなった。この結果を受け、第 3 節ではこれまで過小に評価されてきた言説、「軍団兵にふさわしい人材の剣闘士への流出」について再検討した。共和政期から帝政へと社会が変化の中で、イタリアの若者にとっての生業としての軍団兵の利点が失われていくなか、従事期間、報酬、居住地といった待遇面で剣闘士は軍団兵に替わる現実的な選択肢とみなすことができると結論づけた。

第 5 章では、上層民と剣闘士競技の関係性を再検討する。従来の研究において剣闘士競技をはじめとする見世物への上層民の参加は、市民の場合と同様に一部の者たちによる例外的な行動と考えられてきた。しかし、第 1 節において関連史料を精査したところ、この見解はキケロや小セネカといった一部の作家の叙述から導出されていたことが判明した。第 2 節で行った共和政末期から帝政初期に確認される剣闘士競技への参加規制についての分析では、規制と同時に違反が頻繁に確認されることから、先行研究の見解への疑念は高まった。そこで、上層民の子息による見世物への出場を規制する後 19 年の元老院決議を分析したところ、見世物への出場をめぐる是非が、世代ごとはもちろん、個人のなかでも揺らいでいたことが読み取れた。この結果を受け、第 3 節では、これまでカリグラやネロといった「悪帝」の性質に帰されてきた上層民への見世物の参加強制について見直した。実際にこうした行為は、彼らに限らず、カエサルやアウグストゥスにも見られるものであり、むしろ共和政期から上層民の子息が衆目のなか競技祭や剣闘士競技、戦車競走などに参加する伝統が確認された。そして第 4 節では、その背景には、上層民の間で武芸習得のために競技に取り組む慣習が存在したことが明らかになった。したがって、上層民による剣闘士競技への参加は、それを伝統的な競技祭的枠組みで捉える者と、社会秩序の回復や安定を目指す者との対立構造のなかで理解すべきであるという結論を導き出した。

第6章では、皇帝と剣闘士競技の関係性について考察する。前章での考察結果とは対照的に、後1世紀後半のフラウィウス朝の成立以降、それまで確認された上層民たちによる剣闘士競技への出場が史料上に確認されなくなる。本稿では、この現象の背景に皇帝と剣闘士競技の関係性に何らかの変化が生じたとの仮説を立て、第1節で当該の期間における例外的事例を手がかりにこれを検証した。その結果、見えてきたのはライオン狩りと皇帝の密接な関係性であった。そこで第2節でライオン狩りとドミティアヌスとコンモドゥスの関係性について分析したところ、その背景にヘラクレスのイメージが関連していることが抽出された。第3節ではドミティアヌスとコンモドゥスの間の期間での皇帝とライオン、ヘラクレスの関係について考察した。その結果、当該の期間においてもそれらの結びつきが一定の連続性を有していたことが確認された。そこで第4節でヘラクレスと自身の存在を一体化させるイメージ戦略の背景を探ったところ、皇帝たちのそのようなイメージ戦略には、ヘラクレスの象徴する美德 *virtus* の特権化を図るという狙いが存在したことが読み取れた。以上のことから、ドミティアヌスの治世以降に上層民による剣闘士競技などの見世物への出場が見られなくなる現象は、それらへの出場という行為が *virtus* を示すものであり、そして、それを象徴するヘラクレスが皇帝と一体化したために、上層民による *virtus* 顕示の機会が制限されたということを反映しているという結論に至った。

結論では、各章の考察結果を振り返ったうえで、諸階層の人々がそれぞれの状況にあわせ剣闘士競技を利用することで自らを利していたこと、そして階層を跨ぎ生業としてだけではなく競技として社会に定着していたことが確認され、そのうえで帝政前期における剣闘士競技を取り巻く人間関係が流動的であり、その流動性こそが剣闘士競技へのローマ人民の熱狂を支えたことが述べられる。そして最後にローマ社会を構成するあらゆる人々の視点を包摂する存在が剣闘士であったという結論が述べられる。